



財団法人 自然保護助成基金

ニュース NO.7

創立5周年特集号 1998. 4. 1.

## (財)自然保護助成基金 5年間の歩み

財団法人自然保護助成基金は、平成10年4月創立満5周年を迎えました。この間、(財)日本自然保護協会との共同事業であるプロ・ナトゥーラ・ファンドによる公募助成と、直接助成の二本立ての事業により、5年間で1億9千1百万円を、国内・海外の自然保護に資する研究調査・活動を行う多くのグループに助成して、この分野ではいささかの貢献を致して参ったと考えております。

プロ・ナトゥーラ・ファンドは、当基金発足前から、設立母体であるPRO NATURAが、3年間にわたって助成してきたものを引き継いでおり、すでに8期を経過しています。毎年6、7月に公募を行い、両者が委嘱した各方面の権威の審査員によって厳正審査のうえ助成を決定、資金を交付しています。1997年には新たな試みとして、緊急なテーマについて、少額の助成金を迅速に交付する制度を試行しました。

直接助成は、当基金が緊急性と重要性を認知したテーマについて、随時その活動母体に対して助成を行うもので、国内では毎年、(財)日本自然保護協会と(財)世界自然保護基金日本委員会の事業に対して助成するほか、北海道湿原の調査研究、長良川河口堰事業モニタリング調査といった大きなテーマに、継続して助成を行いました。また海外では、ロシア極東森林のホットスポット・プロジェクトに連続して助成を行い、当基金からも研究者を派遣して支援しています(主要助成事業については次頁ご参照)。

当基金では、ここに5周年を迎えるにあたり、日頃ご支援ご協力賜っております皆様に5年間の実績を纏めてご報告致すとともに、今後も引き続き、病める地球のために、またそれを救おうとする人々のために、微力を尽くして参りたいと存じます。宜しく願い申し上げます。

## ■ ロシア極東森林のホットスポット・プロジェクト

地球の友日本

熱帯林の喪失に世界の目が奪われている間に、ロシアの森林は大規模な破壊が進行し、地球の気候変動に重大な影響を及ぼしかねない状況にある。ロシア極東の貴重な森林を緊急に調査し、一刻も早く保護をはからねばならない。現地の研究者・活動家を動員して、保護区設定を目指す国際的プロジェクト。

## 海外助成の事例

### ■ 中国奥地の稀少動物の研究・保護

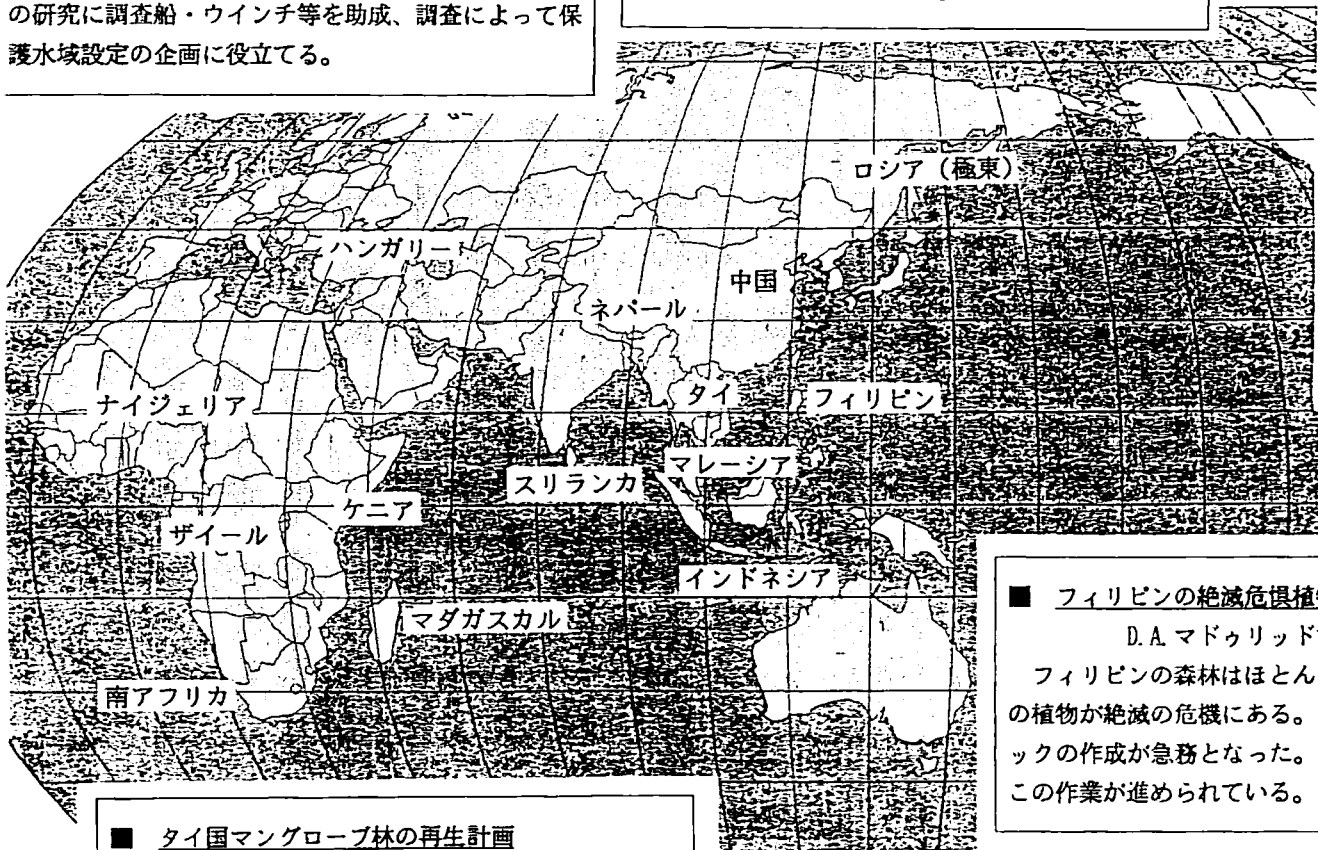
中国各地の研究者多数

中国中部・西部山地に生息する、パンダ、ジャコウジカ、キンシコウなどの稀少動物は、開発の進展とともに生息域が次第に狭められ、緊急に保護策を講じる必要があり、そのためにもそれらの生態を正確に把握する調査が必要となっている。

### ■ タンガニカ湖の生物多様性と保護

M.M. ガサガジャ (ザイール国立研究所)

タンガニカ湖は南北 650キロにおよぶ大湖で淡水魚の宝庫であるが、実態は充分把握されていない。その研究に調査船・ウインチ等を助成、調査によって保護水域設定の企画に役立てる。



### ■ フィリピンの絶滅危惧植物

D.A. マドゥリッド博士

フィリピンの森林はほとんど破壊され、多くの植物が絶滅の危機にある。この調査と種目録の作成が急務となった。日本からの助成により、この作業が進められている。

### ■ タイ国マングローブ林の再生計画

チット・コンセンチャイ (タイ王室林野局)

タイのマングローブ林は、日本向けエビの養殖池造成で大半が失われた。その再生には多くの種子が必要となるが、種子を分割して発芽させる方法を確立。

### ■ キナバル山域の蛇紋岩植生の調査

ラムリ・アリ (サバ州公園局)

域外に貴重な蛇紋岩植生が存在するが、開発の進展により、早急に保護を要するため、本基金の助成により調査が実施された。

## ■ 日本の地形レッドデータブックの刊行

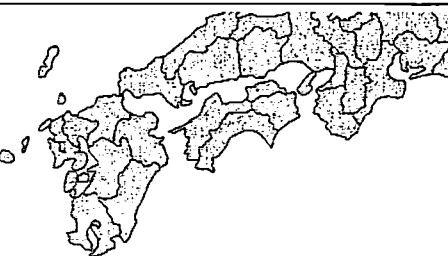
日本の地形レッドデータブック作成委員会

自然保護といえば動植物との固定観念を打破し、我が国の保存すべき重要な地形を、全国の地理学者を動員してリストアップし、多大な反響を呼んだ。現在その全訂版、第2集を刊行中。

## ■ 希少ウミスズメ類の現状と保護

日本ウミスズメ研究会

ウミスズメ類は海上に生息し、離島で繁殖するため、調査が困難であるが、本基金の助成によって、2年間にわたり海上・離島の調査を実施、その生息数・産卵状況が次第に明らかとなった。



## ■ 日本産ジュゴンの現状と保護

ジュゴン研究会

沖縄で僅かに生息するジュゴンの存在を空から確認したうえ、その知られざる生態を潜水調査しようという新たな研究が本助成により開始される。

## 国内助成の事例

### ■ シマフクロウの生息環境の保全に関する研究

シマフクロウ研究グループ

絶滅危惧種の鳥シマフクロウの分布状況と、生息域の河川で餌となる魚類の密度の調査を行い、魚類の密度が低下し、給餌状況が悪化している実体を指摘。

### ■ 北海道湿原の調査研究

北海道湿原研究グループ

我が国の湿原の90%は北海道にあり、またその面積の90%を失ってしまったいま、残された北海道湿原の保全は緊急の課題であるが、それにもかかわらずその実態はあまり解明されていなかった。この調査によって全体を把握し、主要な湿原の現状が明らかにされた意義は大きい。その結果はレッドデータブックともいふべき250ページの報告書に纏められた(当基金刊)。

### ■ 長良川河口堰事業モニタリング調査

長良川河口堰モニタリング調査グループ

大規模公共事業と自然保護について、国を二分する論争を呼んだ河口堰、そのどちらの言い分が正しかったかは調査データが証明する。従来は開発の完了で結論が曖昧のまま打ち切りとなっていたが、ここでは5年間の継続助成によって結果を検証する。今後の開発論争に科学的知見をもたらすものと期待される。

### ■ 御蔵島原生自然植生域の生態学的研究

御蔵島自然研究グループ

壊れ易い島嶼の自然にあって、奇蹟的に原生自然が残存する伊豆御蔵島は、ほとんど組織的な調査が行われていなかった。2年間にわたる調査により、この島の貴重な植生とその保護の重要性が明らかとなった。

### ■ イリオモテヤマネコ集団の遺伝子多様性の評価

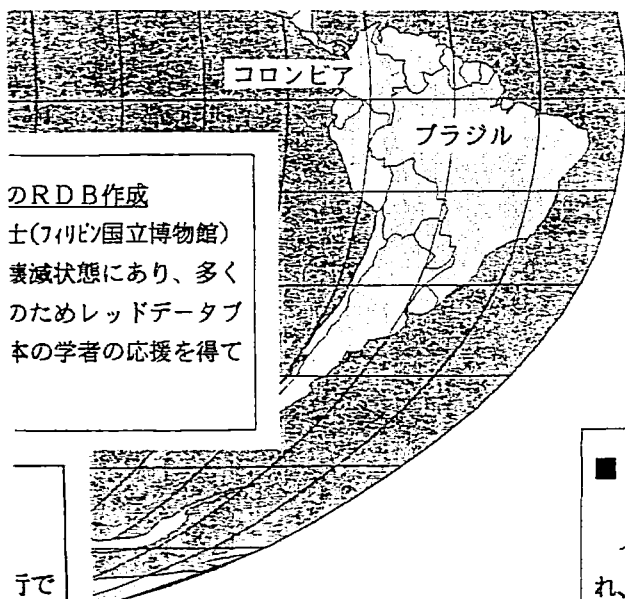
哺乳類遺伝的多様性研究グループ

イリオモテヤマネコの生息数は100頭前後と見られ、絶滅が懸念されるが、その遺伝的多様性が極度に低下していることが明らかとなった。さらにツシヤマネコを含めて調査中。

## のRDB作成

士(フィリピン国立博物館) 衰退状態にあり、多くのためレッドデータ本の学者の応援を得て

で  
が



## 助成の年次別実績

年次	助成額	(内P.N. ファンド分)	(参考)
1993年	26件 55百万円	( 18件 27百万円)	1990-1992 年
1994年	23 " 34 "	( 18 " 22 " )	PRO NATURAの
1995年	27 " 35 "	( 22 " 22 " )	P.N. ファンド
1996年	27 " 34 "	( 21 " 22 " )	助成額実績
1997年	25 " 33 "	( 21 " 21 " )	53件 106百万
<hr/>			
	128 " 191 "	(100 " 114 " )	

## 役員名簿 (平成10年4月1日現在)

### 理事

#### 理事長

奥 富 清 (東京農工大学名誉教授)

#### 専務理事

岡 本 寛 志 (公共建物監査役)

#### 理事

伊 藤 和 明 (文教大学教授)

大 井 道 夫 (財国立公園協会顧問)

大 場 達 之 (千葉県中央博物館客員研究員)

岡 本 和 子 (株サイクル営業所長)

川那部 浩 哉 (滋賀県立琵琶湖博物館長)

沼 田 真 (財日本自然保護協会会長)

吉 井 正 (財山階鳥類研究所顧問)

門 脇 健 事務局長

### 評議員

有 賀 祐 勝

(元東京水産大学教授)

伊 藤 卓 雄

(公害健康被害不服審査会委員)

大 谷 一 良 (版画家)

岡 部 牧 夫 (著述業)

木 原 啓 吉 (江戸川大学教授)

坂 倉 登 喜 子 (登山家)

土 田 勝 義 (信州大学教授)

水 野 憲 一

(株)NHKエンタープライズ・

エクゼクティブプロデューサー)

三 宅 修 (山岳写真家)

山 瀬 一 裕

(財)自然環境研究センター

常務理事)

### 監事

釘 宮 秀 介 (株元 代表取締役)

中 村 岩 男 (税理士)

和 田 一 雄 (元東京農工大学

教授)

設 立 平成5年4月1日

基本財産 20億円



Pro Natura ニュース第7号

創立5周年特集号

発行者: 財団法人 自然保護助成基金

発行年月日: 平成10年4月1日

東京都渋谷区松濤1-25-8 〒150-0046

TEL: 03-5454-1789 FAX: 03-5454-2838